

榛名山ニッ岳火山灰の降下範囲図

榛名山ニッ岳の火山灰

●榛名山ニッ岳火山灰(Hr-F A)

古墳時代後期の6世紀初頭に噴火した、榛名山ニッ岳の火山灰。細粒の火山灰、火砕流堆積物、軽石などからなる15層のユニットが確認されている。金井東裏遺跡では、約30cmの堆積が認められる。給源から東～南東の方向に火山灰を降下させ、東側は栃木県宇都宮市、南東側は埼玉県鴻巣市で確認され、それぞれ給源から約100kmの距離にある。県指定史跡の中筋遺跡(渋川市)は、この火山灰で埋没した集落遺跡である。

●榛名山ニッ岳軽石(Hr-F P)

古墳時代後期の6世紀中頃に噴火した、榛名山ニッ岳の軽石。主に軽石からなる19層のユニットが確認されている。金井東裏遺跡では、約2mの堆積が認められる。給源から北東の方向に軽石を降下させ、最も遠い地点では宮城県多賀城市で確認され、給源からの距離は約300kmに達する。国指定史跡の黒井峯遺跡(渋川市・旧子持村)は、この軽石で埋没した集落遺跡である。なお、ニッ岳はこの噴火の後に出来た溶岩ドームである。

◀手前からニッ岳、榛名富士、冠雪の浅間山
(ニッ岳の周囲に見える窪みが噴火口)



かない ひがしうら いせき 金井東裏遺跡

— 現地説明会資料 —
平成24年12月12日(水)

群馬県渋川市金井

よるい
～ 古墳時代の甲を着けた人骨 ～

主催/公益財団法人 群馬県埋蔵文化財調査事業団
協力/群馬県教育委員会・群馬県渋川土木事務所
渋川市教育委員会

ごあいさつ

金井東裏遺跡は、国道353号金井バイパス(上信自動車道)の建設に伴い、平成24年9月から公益財団法人 群馬県埋蔵文化財調査事業団が発掘調査を行っています。

榛名山は古墳時代後期の6世紀代に、2回の大きな噴火を起こしました。遺跡の周辺一帯にはその際に降下した火山灰が厚く堆積しており、遺跡を良好な状態で保存しています。

平成24年11月下旬、古墳時代後期の6世紀初頭に噴火した、榛名山ニッ岳の火山灰(Hr-F A)の中から、甲を着けた人骨や乳児の頭骨が発見されました。

古墳時代において、人が甲を着けた状態で出土した例は全国で初めてであり、また火山灰の中から人骨が出土した例も全国初です。

甲を着けた古墳時代人の姿や、火山灰の状況をつぶさにご覧下さい。



金井東裏遺跡 位置図



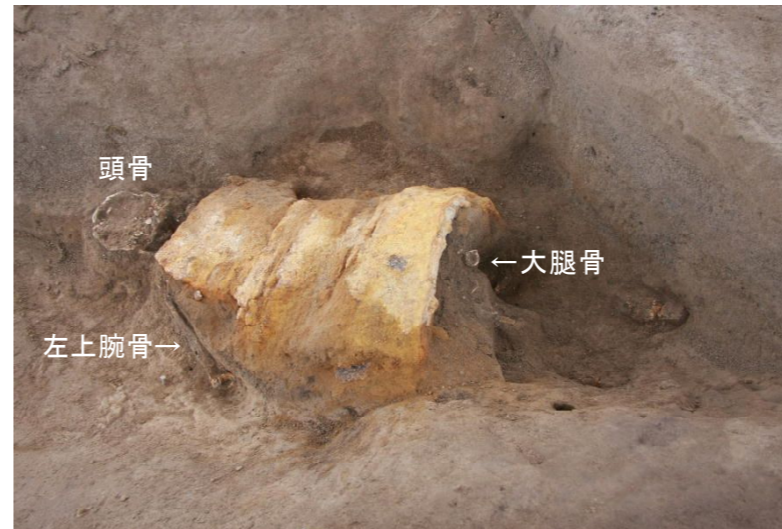
甲を出土した溝と火山灰の堆積状況(西から)



溝内の甲と人骨の出土状況(西から)



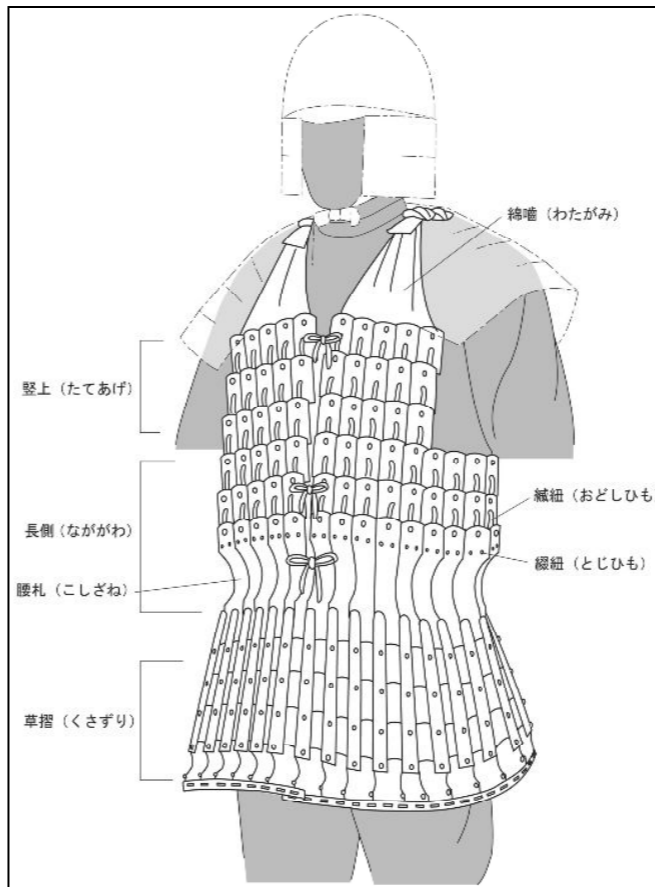
溝内の火山灰堆積状況(東から)



甲を装着した人骨(南から)



甲を装着した人骨(南東から)



甲(小札甲)の復原図

甲を付けた人骨の概要

今回発見された^{よろい}甲 装着の人骨や乳児頭骨および甲部品は、6世紀初頭の火山灰で直接埋没した幅2m、深さ1mの溝の中からの出土である。周辺には竪穴住居群が検出されているが、いずれも5世紀後半で、現在のところこれらの人骨と同時期のものは検出されていないことから、今後の調査による発見が期待される。

甲を装着した人骨及び甲の部品は、溝の底面から10cmほどの高さで出土し、また乳児頭骨は溝の北側の^{のりめん}法面に貼り付いた状態で出土している。両方とも同じ火砕流堆積物で埋没していることから、同一時期に被災して埋没したと判断される。

人骨に伴う甲は背中側を表にして出土しており、高さ60cm、幅50cmとやや寸詰まりの状態、草摺が長側方向にずり上がった状態と考えられる。また、この甲は破片断面に長さ約5cm、幅約2cm、厚さ1mmの小鉄板が複数枚で相互に重なり合う状況が観察されることから、小札甲と判断される。

上流側にある甲の部品は表面の腐食が著しく、それが本体のどの部位に該当するのか、また、両者が一体のものか否か^{しご}についても、現段階では不明である。甲装着の人骨は、後頭部や四肢骨の一部が欠失しているものの遺存状態は良好であり、骨格の状況から成人男性と判断される。乳児骨については、頭部の一部が残存するのみであるが、その大きさと骨質から生後数ヶ月の乳児のものと判断される。